

日本家政学会誌 Vol. 50 No. 1 69~77 (1999)

資料

『経済小学 家政要旨』の刊行事情と内藤伝右衛門

谷 口 彩 子

(熊本大学教育学部)

原稿受付平成 10 年 5 月 2 日；原稿受理平成 10 年 9 月 24 日

Circumstances on Publication of "Keizaishogaku Kaseiyoshi"
and the Publisher, Naito Den'emon

Ayako TANIGUCHI

Faculty of Education, Kumamoto University, Kumamoto 862-8555

"Keizaishogaku Kaseiyoshi" is the translation of books on home management which spread most widely in the early Meiji Era. The purpose of this paper is to clarify the role of the publisher, *i.e.*, what role Naito Den'emon played in the process of spread as well as the circumstances on publication of "Kaseiyoshi."

The conclusions are as follows:

1) Ten editions of "Kaseiyoshi Zenpen (the first part)" and three editions of "Kaseiyoshi Kohen (the latter part)" were confirmed. 2) The popular edition published by Naito Den'emon in which *kana* phonetic syllabary was provided alongside Chinese characters for easy reading contributed a great deal to the spread of "Kaseiyoshi." Also contributed were Naito Den'emon's energetic sales activities coupled with excellent translation by Nagamine Hideki. It goes without saying that the excellent quality of the original played a major role in the wide spread of the popular edition. 3) In order to increase funds for his newspaper business, Naito Den'emon energetically continued to publish varieties of textbooks. 4) It is evident that he contributed to the enhancement of school education through the publication and sales of textbooks.

In this paper, it is clarified that the Naito Den'emon as publisher endowed with enterprising spirit contributed to the spread of "Kaseiyoshi" along with Western concept of household management.

(Received May 2, 1998; Accepted in revised form September 24, 1998)

Keywords: developmental history of home economics 家政学成立史, translated books on home management 翻訳家政書, "Keizaishogaku Kaseiyoshi" 『経済小学 家政要旨』, Naito Den'emon 内藤伝右衛門, early Meiji Era 明治初期.

1. 緒 言

明治初期における翻訳家政書は、近代国家への歩みを始めたわが国歴史上の転換期という社会背景のもとで、それまでの家事教育に対して啓蒙的な役割を果たすとともに、その後の家政教育に多大の影響を及ぼした出発点と考えられてきた。なかでもハスケル原著、永峯秀樹抄訳『経済小学 家政要旨』内藤伝右衛門、明治 9 (1876) 年刊 (以下『家政要旨』と略す) は、明治初期の翻訳家政書の中で最も広く小学校や女学校の教科書として採用され、啓蒙的な役割を果たしたものとして特に著名である。筆者は、これまで不明であ

った同書の原典解明および原書と訳書との比較考察、ならびにその原書の特質解明を行ってきた。その結果、『家政要旨』の原典は、1861 年に、Mrs. E.F. Haskell によってアメリカで刊行された "The Housekeeper's Encyclopedia" であり、その 6 割以上が料理に関する内容であること、『家政要旨』に訳出されたのは、緒言と本文 424 ページのうち約 1 割の 40 ページにすぎないこと、訳出された内容は、家族、家庭経営、栄養、食品、介護、保育に関する内容であること、などが解明された¹⁾。さらに、19 世紀アメリカ家政教育史において特に著名なビーチャー (Catherine E. Beecher,

1800-1878) の代表的な家政書 3 冊との比較の結果、『家政要旨』がわが国において普及した理由として、原書がハスケル夫人の家政経験に基づく具体的な内容であったこと、アメリカ産業革命期の主婦を読者対象とした原書の内容が、明治中・後期のわが国の産業革命以降、中流階級の主婦層の台頭に備えるという時代を先取りする内容であったこと、翻訳者永峯秀樹の訳文が、理解しやすい意訳であったことなどを解明した²⁾。こうした原書研究をふまえ、つぎに『家政要旨』のわが国における刊行事情について検討する必要がある。

『家政要旨』は、明治 5 (1872) 年の学制頒布以降、学校教育制度が確立する一方で、学校用教科書が不足するという社会背景の中で刊行されている。しかも翻訳物を中心とする教科書採用のあり方への反省から文部省が教科書調査を実施する (明治 13 (1880) 年) 前段階にあり、教科書採用は各学校の自由裁量に委ねられていた時代に出版されている。

明治初期に刊行された翻訳教科書の多くは東京で出版されているのに対し、『家政要旨』は甲府で出版されている。それにもかかわらず、明治初期の家政書の中で最も出版部数が多く、表 1 に示すように、甲府のみならず全国の小学校や女学校で教科書として使用されている点に着目できる。同書の普及には、その原典の内容や翻訳者永峯秀樹のわかりやすい訳文と併せて、出版者内藤伝右衛門の関与するところが大きかったと考えられる。本研究では、これまでの研究では触れられてこなかった出版者内藤伝右衛門が『家政要旨』普及過程において果たした役割に着目しながら、『家政要旨』の刊行事情について考察を行う。

2. 『経済小学 家政要旨』の体裁とその変化

(1) 『経済小学 家政要旨』の体裁と種類

『家政要旨』は、明治 9 (1876) 年に刊行されたハスケル原著、永峯秀樹抄訳『経済小学 家政要旨』と、明治 13 (1880) 年に刊行された、コスブルとコムの原書をもとに永峯秀樹が抄訳・編集した『経済小学 家政要旨 後編』の 2 編からなり、いずれも甲府の内藤伝右衛門によって刊行されている (以後これらを『家政要旨 前編』『同 後編』と記す)。この 2 編は、それぞれ和装本から洋装本までさまざまな体裁のものがある。そのうち最も早く刊行されたと推定される『家政要旨 前編』半紙判の体裁については、すでに別稿において紹介を行っている¹⁾。

筆者は、同書の出版状況を把握・検討するために、平成元年 7 月から同 9 年 10 月にかけて、国立国会図書館、東書文庫、東京家政学院大学附属図書館、山梨県立図書館甲州文庫等の所蔵本について、『家政要旨』の体裁に関する調査を行った。その結果と、すでに田中と田中により紹介されているもの³⁾⁴⁾とをあわせ、体裁について分類を行ったのが表 2 である。No. 1 ~ 22 が『家政要旨 前編』、No. 23 ~ 25 が『同 後編』である。体裁を検討することで『家政要旨』の出版状況について次のことがわかる。

まず奥付の刊記を検討した結果、出版年は、明治 9 年 10 月 (No. 1 ~ 12)、明治 10 年 7 月 25 日 (No. 15, 16, 18, 20 ~ 22)、明治 10 年 7 月 25 日と同年 11 月 9 日の再版出版の日付が併記されているもの (No. 17)、明治 12 年 7 月 (No. 23 ~ 25)、明治 13 年 4 月 15 日 (No. 26 ~ 28) の 5 種の記述がみられる。さらに版権免許取得はこれを上回る 7 種の日付が記されている。すなわち明治 9 年 8 月 19 日 (No. 1 ~ 7)、明治 9 年 9 月 1 日 (表見返しの記載による; No. 8, 9)、明治 9 年 8 月 19 日と明治 12 年 12 月 13 日という再版届出の日付が併記されているもの (No. 10 ~ 12)、明治 10 年 2 月 2 日 (No. 15, 16, 18, 20 ~ 22)、明治 10 年 2 月 2 日と同 10 年 10 月 30 日の再版届出の日付が併記されているもの (No. 17)、明治 11 年 5 月 29 日 (No. 23 ~ 25)、明治 13 年 3 月 5 日 (No. 26 ~ 28) の日付のものがある^{*1}。版権免許取得や出版の日付が同一であっても、印刷方法や表見返し・奥付の記載内容の違いなどから、それを上回る改版が行われ、また版が同一であっても製本時が異なるとみられる本もある。たとえば A 本は、表見返しや奥付 (定価の記載の有無を含む) の記載内容、巻末の発兌書肆目録の内容などによって、製本時が異なるとみられる 5 種類に分類される。以上の検討結果から、少なくとも『家政要旨』は前編 10 種類、後編 3 種類の異なる版があったと推定される。

*¹ 甲州文庫には「家政要旨出版々権御願」(明治 13 年 4 月)、「家政要旨版権免許之証」(明治 9 ~ 13 年、4 枚) が所蔵されている。「版権免許之証」によると、明治 9 年 8 月 19 日、明治 10 年 2 月 2 日、明治 11 年 5 月 29 日、明治 13 年 3 月 5 日の 4 回にわたって版権が取得されている。さらに内務省『版権書目』第 2 ~ 4 号、明治 10 ~ 13 年 (朝倉治彦監修『日本書籍分類総目録』第 1 卷、日本図書センター、1987 年所収)において確認したところ、甲州文庫所蔵の 4 枚の「家政要旨版権免許之証」の記載と一致し、これ以外にその書名は見出せなかった。

『経済小学 家政要旨』の刊行事情と内藤伝右衛門

表1. 『経済小学 家政要旨』のおもな使用状況

掲載年	府県名	学校名	学年・級	教科名	備考
明治9年 (1876)	京都	京都府女学校	第3級	読物	文部省第四年報付録, 181頁
10 (1877)	群馬	師範学校	第4級	—	文部省第五年報付録, 92頁
	千葉	女子師範学校	第2級	読物	同上, 104頁
	茨城	女子師範学校	—	経済学	同上, 113頁
	栃木	変則小学	第2級	読物	同上, 124頁
	東京	女子師範学校	予科・第1級	経済学	同上, 389頁
11 (1878)	長崎	女児小学	第3年第1期第4級	読物	文部省日誌, 明治11年第3号, 18頁
	静岡	小学	一等教則上等	読物	同上, 29頁
			二等教則上等		同上, 32頁
	青森	女子師範学校	予科・第2級	経済学	同上, 明治11年第7号, 6頁
	山梨	女子高等小学	第4級・第3級	読物	同上, 明治11年第11号, 18頁
		女子変則小学	第3級・第2級	読物	同上, 26頁
		女子師範学校	第3級・正科	家政学	同上, 明治11年第17号, 40頁
	群馬	師範学校	第2級	経済学	同上, 明治11年第18号, 5頁
12 (1879)	高知	徳島女子師範学校	学問科	読物	同上, 明治12年第1号, 8頁
		附属女子手芸学校	第5~3級		同上, 明治12年第2号, 8頁
	茨城	女子師範学校	—	経済学	同上, 25~26頁
	神奈川	女子上等小学	第6・5級	講読	同上, 明治12年第8号, 19~20頁
	山形	女子上等小学	第5・4級	輪読	同上, 明治12年第10号, 36頁
	京都	女学校女紅場	女学 第5級	読書	同上, 明治12年第12号, 4頁
	大分	師範学校	第4学期	経済学	同上, 明治12年第13号, 18頁
	鹿児島	女子師範学校	第4級	経済学	
13 (1880)	石川	高等小学	第1級前・後期(女子)	経済	同上, 明治13年第13号, 37頁
14 (1881)	山形	小学	(小学校教科書表)	家事経済	同上, 明治14年第33号, 24頁
15 (1882)	和歌山	小学	(小学校教科書表)	家事経済	同上, 明治15年第15号, 45頁
	群馬	小学校教員免許授与規則	高等科	家事経済	同上, 明治15年第25号, 12頁
	愛知	小学	高等科第8年第1級	家事経済	同上, 明治15年第27号, 添付表

『文部省年報』『文部省日誌』より作成。

これはいかに『家政要旨』が繰り返し印刷され普及が図られたのかを示している。

定価は、前編半紙判が55銭、同四六判が30銭^{**}、後編半紙判が50銭、四六判が45銭である。ただし、奥付の定価の記載が削除されている版が多くみられる。

(2) 印刷方法の変化と内藤伝右衛門

『家政要旨』の印刷方法の変化には着目できる。『家

^{**} No. 17 のほか内藤伝右衛門が出版した『百科全書経済論 上』『同 養生編 下』に掲載されている『家政要旨』の広告に「定価三十銭」と記載がある。

政要旨 前編』初版本では、半紙判で木版刷であったが、四六判の小型本では、3種類の異なる活字の組み方による4号活字本(『前編』)から5号活字本(『後編』)へと印刷方法が変化している。このことと後述する印刷機械購入の経緯から、出版者内藤伝右衛門が、短期間のうちに積極的に新しい印刷技術を導入したことが理解できる。さらに『家政要旨』四六判では、漢字の右側に読み方を、左側に意味をルビで記すことによって、より活用しやすくなる工夫を行っている。『家政要旨 前編』小型本にみられる内藤伝右衛門の

表2. 『經濟小学 家政要旨』体裁と種類 (分類表)

大きさ：大（半紙判），小（四六判），紙：和（和紙），洋（洋紙），活字：木（木版刷），4A（4号活字1ページ20字×9行），4B（同23字×9行），4C（同23字×10行），5D（5号活字25字×10行），綴じ：和（和綴），洋（洋綴），表紙：和（厚ボール紙），ボ（厚和紙），題字：記載のあり，なし，◎（口絵，跋言あり），その他：題箋，表見返し，扉，奥付等は同一記載内容ごとにA，B，と分類した。^{*}No.22の定価の記載は、印刷ではなく、筆書きによる。**国立国会図書館蔵書資料はマイクロフィッシュ化されたものと思われる。同書の販売書店が記したものは不明。

『経済小学 家政要旨』の刊行事情と内藤伝右衛門

跋言には、こうした傍訳本刊行の意図が記されている。その跋言によると、小型本の出版年は明治10年7月25日、この跋言は明治10年10月に記されているので、小型本の初版が刊行されてわずか2、3カ月の間に3,000部が残らず売り切れたことになる。『家政要旨』小型本は、小学校用教科書として売れ行きが好調であることを受けて、学校のみならず一般女性が家庭で閲覧する便宜を図るために、小野 泉（翻訳者永峯秀樹の長兄、後述）による傍訳を付して刊行されたものである。いわばこの小型本は、『家政要旨』の普及版としての役割を果たした。

体裁等の検討から『家政要旨』が普及した理由として、出版者内藤伝右衛門が傍訳付きの普及版を出版したこと、東京に支店^{*3}を出して販売を行ったことがあげられる。巻末の発兌書肆名目録には、77店舗、234店舗、240店舗の書店名が記されている3種類の目録がある。短期間ににおける書肆目録の変遷から、『家政要旨』普及の背景として、学校用教科書を扱う書店の全国組織が急速に拡大していたことを指摘できる。

3. 翻訳者永峯秀樹の略歴と内藤伝右衛門

『家政要旨』は、翻訳者永峯秀樹による抄訳の結果、その原典とは性質の異なる内容になった¹¹⁾。『家政要旨』は、明治以降の家政教育・家政学研究の出発点と考えられることから、翻訳者永峯秀樹が家政教育の内容構成に重要な役割を果たしたといえる。翻訳者永峯秀樹の略歴についてはすでに紹介を行っている¹¹⁾。

永峯は内藤伝右衛門との関わりについて、纂訳書『農学初歩』の「序」の中に、「世間ノ著書訳書適応ノ者少ナキヲ患ヒ甲府書林内藤氏来リテ余ニ農書ノ編輯ヲ乞フ余ヤ譲劣固ヨリ此大任ヲ荷フニ足ラス然リト雖モ余農學ニ志アル茲ニ數年西人ノ農書中今日ニ適切ノ者ヲ纂訳シ積テ數十葉ニ至ルアリ」⁵⁾と記している。内藤伝右衛門が永峯のもとへ出版の依頼に訪れ、永峯

^{*3}『家政要旨』奥付の東京（支）店の住所は「東京通塩町十一番地」と「東京第一大区五小区本石町十軒店五番地」の2種の記載があり、表2のNo. 26~28には「壳弘人 東京支店 内藤泰次郎 日本橋区通塩町十一番地」とある。内藤泰次郎は伝右衛門の次男である。巻末の「初兌書肆目録」240店舗記載の末尾に「山形鶴岡内藤支店 鈴木勝利」「東京 山添栄助」ほか、伝右衛門の長男実太郎、次男泰次郎、三男厚三郎の名前がみえる。このように伝右衛門は息子や社員を東京その他の支店に常駐させ、本の販売にあたらせていた。

が纂訳によってその依頼に応えようとしている経緯が記されている。ここでは、伝右衛門から洋書が持ち込まれ、永峯に翻訳の依頼が行われているのではない。当時永峯が甲府ではなく、東京にいたということは、甲府よりも洋書の入手がしやすい環境にあったと考えられる。『家政要旨』の翻訳・刊行も、これと似た経緯があったと推測できる。

4. 出版者内藤伝右衛門の略歴と新聞・出版事業

つぎに、出版者内藤伝右衛門に関する伝記・資料等を参考にしながら、その略歴を記す⁶⁾⁷⁾（このほかに関連資料として文献8)~10)がある）。

内藤伝右衛門は、弘化元（1844）年1月14日、山梨県八幡北村（現在の山梨市北）の農業を営む手塚左右衛門の家に生まれ、幼名猪之甫といった。生後間もなく甲府八日町の藤屋伝右衛門の養子となり、万延元（1860）年、病弱であった養父初代伝右衛門死去の後に相続、2代目伝右衛門を襲名した。

藤屋はもともと甲府八日町二丁目で、「絵草紙、古本・太物・古着・古道具類」を扱っていたが、嘉永7（1854）年の『甲府買物独案内』によると、「西洋和漢書・筆硯書・地本・錦絵・絵草紙」を商っている。養父死去のあと、藤屋の家業を相続した16歳の伝右衛門は、それまで通っていた山田町の漢学者向山伊之助の塾をやめた。そうした伝右衛門のために、養母満寿は、自分の得意な国学を自ら教えた。養父病弱のため、藤屋は早くから養母満寿がきりもりしていたが、その愛嬌のためもあり、藤屋の店内は社交場のように多くの人材が集まった。伝右衛門もその中にあって、文明開化への情熱を燃やしたといわれる¹¹⁾。

明治4（1871）年の廃藩置県以後、明治政府はその政策を国民に徹底させるため新聞の発刊を推進、山梨でも県庁内でその計画が進められた。学務課の小野泉や林 閻等が中心になって県下の各役場から記事を集め、その印刷・出版を藤屋が担当したのが山梨県最初の新聞「峠中新聞」である。文明開化の先達となることに感激した伝右衛門は、三枝七内から金千円を借りて東京へとび、かねて絵草紙屋仲間で相知る日本橋横山町の和泉屋・坂田金右衛門を訪ねた。「郵便報知新聞」の发行人ともなっていた金右衛門と相談し、「郵便報知新聞」と同じ雑誌型の体裁で発行することを決め、その足で彫工探しを始めた。四谷甲賀町の御用版木師「彫己之」の養子滝沢宗三郎が文字に巧みであることを知り、同家に座り込んで強引に口説き落と

すと、その夜のうちに連れ出して通し駕籠で甲府まで一気に走り、翌日から仕事に取りかからせた。これは伝右衛門の強引な性格を表すエピソードであるとともに、当時の東京と甲府との距離や交流の実情を示している。こうして「峠中新聞」の第1号は、明治5(1872)年7月1日に誕生した。定価3銭。

明治6(1873)年2月、新任の県令藤村紫朗は県庁での新聞編集をやめ、新聞事業の一切を伝右衛門に譲った。それに伴い同年4月第9号より「甲府新聞」に改めた。その第2号より新しいもの好きの伝右衛門は鉛活字の明朝体4号による印刷機械を購入、月8回発行することにした。この経費1万円は再び三枝から借用した¹²⁾。当時このような印刷機械は珍しく、甲府城内博覧会にも出品された。明治8(1875)年、常盤町38番地に青白のペンキ仕上げの藤村式洋風建築で知られる木造2階建ての社屋を造った。2階には養母満寿の女学塾、階下は新聞社および書店とし、印刷工場は別棟とした。山梨県師範学校および小学校教科書を出版し、同時に一般図書も発行、県内外へ送り出しが、その量は1日5,6駄を下らなかったといわれる¹³⁾。伝右衛門は新聞へ論説を掲載するようになって以後、当代一流の記者を招聘することに努めたが、所見が違えば反論して食い下がり、やりこめられた記者達は閉口して半年か1年でやめて帰京した。明治12(1879)年2月、主筆記者が欠員のため、同人社出身の野口英夫を招いたが、翌年12月、野口の才識を見込んで新聞を譲り後継者とした。

この後、伝右衛門は、出版専門に温故堂書店を経営し、『甲斐国志』30巻をはじめ教科書・一般図書数百冊を出版したが、版権訴訟に破れて大きな痛手を被った。新聞以来の借財も重なり、書店の経営は破産同様の状態になった¹³⁾。そこで、明治16(1883)年12月、温故堂書店を長男実太郎に譲って伝右衛門を名乗らせ、自分は隠居して恒右衛門と改め、上京、神田、日本橋馬喰町などで温故書院を経営し、出版事業を続けた。多額の借財を抱え、また明治29(1896)年10月13日、長男実太郎が33歳で死亡するなど、晩年は不遇であった。明治39(1906)年11月18日、東京宅で病没。享年63歳。

5. 内藤伝右衛門と女子教育

(1) 養母満寿と女子教育

伝右衛門は、女子教育関連書を何種類か刊行している。その背景には養母満寿の影響があった¹⁴⁾。

伝右衛門の養母満寿は、甲府連雀町の商家坂本茂介の長女として生まれた。幼少より向学心が高く、長じて堀秀成、小中村清矩らについて国学を学び、早くから才色兼備の誉れが高かった。見込まれてある旗本の養女となるが、養父の窮状を救うために、一時花柳界にあった。25歳で藤屋に嫁いで後もこの時のことを見忘れず、甲府新柳町の遊郭の中に女紅場(塾)を開き、娼妓たちの社会復帰する日のために読書、裁縫を教えるとともに、甲府監獄へ赴き、囚人を集めて説教を行い、出獄後の面倒までよくみた。後に、甲府常盤町の伝右衛門の新聞社の2階に、良家の子女を集め、山梨県最初の女学塾を開いた。和歌をよく詠み、『明治名婦百首』には、次の満寿の歌が収められている。

起きて思ひ臥してはわぶる世の中に などますら
をと生まれざりけむ¹⁵⁾

明治34(1901)年2月20日、常盤町の自宅で死去。享年79歳¹⁶⁾¹⁷⁾。

明治6(1874)年に温故堂 藤屋伝右衛門によって刊行された『女教草』は、内藤満寿の女子教育思想を物語る資料である¹⁸⁾。『女教草』の冒頭に「道は天地をわく本とす。天は高く地は卑く天は上にありて下地を養ひ地は天氣を受て萬物を生む。…婦人は天に隨ふ地にして夫に隨ひ夫の恵みをうけ萬物の靈たる子をうみそだて親に仕へ内事を執りよろづやわらけをさむるを業とするなり」とあるように、君臣、夫婦、親子、兄弟などの人間関係を保つ方法と道理について、女子に教え諭す内容になっている。その特色は、いざなぎいざなみなどの神代の時代から、夫婦関係を保ってきた道理を例を引きながら述べている点と、万葉集などから親子や夫婦の情愛を詠んだ歌を引き歌として採用している点である。婦徳、婦容、三従などの伝統的な教訓について記されている。しかし具体的な家政に関する知識・技術には言及がなされていない。

これに対し、『家政要旨』は、教訓よりも科学的記述に特色がある。家族の健康・快適・幸福という家政目標の実現のために、衣食住の具体的な整え方について、初歩的ではあるが、栄養に関する科学的知識を採

*1 内藤末須『女教草』温故堂、明治6(1873)年、は、表見返しに「權訓導内藤末須著 菱潭深澤先生書 女教草 官許 明治六年九月 甲府 温故堂藏」と記されている。内藤満寿が女学塾を開く(明治8年)以前の刊行であるので、「權訓導」とは甲府の女紅場で女子教育に携わっていた時期の肩書を示している。本文は深澤菱潭による行書体で1ページ4行で書かれている。

『経済小学 家政要旨』の刊行事情と内藤伝右衛門

用しながら具体的に述べている。内藤満寿の日本の伝統的な女子教育觀に基づく内容と『家政要旨』に述べられている家政理念とは、性質が異なっている。

(2) 山梨県女子師範学校の開校

明治 11 (1878) 年 9 月 25 日、山梨県女子師範学校の開校式が執り行われた。もともと内藤伝右衛門は、甲府の小学校等で用いられる教科書販売を一手に扱っていたが、販売だけではなく自ら印刷・出版したもの山梨県内外の教科書として販売することを考えるようになった。甲州文庫には、明治初年から明治 35 年にかけて伝右衛門が出版した本が約 200 種類所蔵されている。『家政要旨』もこうした教科書の一種である。なかでも伝右衛門が『家政要旨』の普及に力を入れたのは、甲府に女子師範学校が設立されたことが背景にある。小学校のみならず、女子師範学校や女学校向けの教科書販売・出版を手がけるようになるのである。『家政要旨』は、山梨県女子師範学校で教科書として用いられている。「山梨県女子師範学校教則」(明治 11 年)によると、開校当時、同校第 3 級正科、家政学^{*5}の教科書として「家政要旨卷ノ上下」と記されている¹⁸⁾。山梨県女子師範学校の生徒募集が行われたのは明治 11 年 6 月 3 日¹⁹⁾、これは内藤伝右衛門が『家政要旨 後編』の版権免許を取得した同年 5 月 29 日の 5 日後であった。

(3) 「をとめ新聞」の発刊

明治 11 (1878) 年 9 月 23 日、山梨県女子師範学校の開校式の 2 日前に刊行された「をとめ新聞」は、甲府における女子教育の発展を期しての刊行であり、のちに他県の女子師範学校においても教科書としても使用されている^{*6}。その第 1 号には、新聞社員の竹野素直による同校の開校を祝う記事が書かれている^{*7}。この「をとめ新聞」は今の新聞とは異なり、半紙判二つ折り 3 枚からなる。正確には何号まで刊行されたのかは不明であるが、甲州文庫には第 1 号から第 8 号および第 10 号が所蔵されている。その「をとめ新聞」の内容は、女子に対する道徳的教訓を記した「をしえ

*5 山梨県女子師範学校では「家政学」という科目名を使っているが、表 1 に示すように、当時この科目名は他に例をみない、また「家政」をタイトルとした明治初期の翻訳家政書は『家政要旨』のみである。

*6 甲州文庫所蔵「乙女新聞購読に付伺並回答等綴」(明治 11 年)は、秋田師範学校における「をとめ新聞」購読決定の経緯を示すものである。伝右衛門が全国の学校に書面を送り、「をとめ新聞」等の出版物を売り込んでいたことを示している。

草」、とくに感心な女性に関する記事を集めた「雑報」、「をとめ新聞」の読者からの投稿記事を掲載する「寄書」、その他広告などの欄があり、5 号活字、ふりがなつきで印刷されている。定価は 8 厘。伝右衛門は新聞の普及を図るために、漢字が読めない読者のためにふりがなを付した。この方法は『家政要旨』小型本(傍訓付)と共通するものである。

第 1 号の「をしえ草」は、冒頭で紫式部の歌の引用から始まっており、内藤満寿の『女教草』との共通点が指摘できる。巻末には社長兼印刷人として内藤伝右衛門の名前が記されており、「をとめ新聞」の内容は、内藤伝右衛門の女性觀を間接的に反映したもので、養母内藤満寿の影響を受けていると考えられる。

「をとめ新聞」第 1 号巻末の新聞広告の欄には「山梨県女子師範学校生徒教科書目」として、『家政要旨』が記されている。これによると『家政要旨』前編半紙判は 50 銭、傍訓付きの四六判は 25 銭と、定価よりそれぞれ 5 銭安く記載されている。これは学校の教科書としての便宜を図ったものと思われる。このことが『家政要旨』奥付の定価の記載がなされていない版が多くみられる理由と考える。さらに内藤伝右衛門が新聞広告を活用して、自社刊行の出版物を宣伝したことでも『家政要旨』の普及を高めた一因である^{*8}。

6. 内藤伝右衛門と『経済小学 家政要旨』の刊行 経緯

内藤伝右衛門とその養母満寿は、国学的な伝統的女子教育觀に立っており、こうした考え方を持つ出版者から、翻訳家政書が出版され普及が図られているという点が興味深い。内藤伝右衛門は『家政要旨』以外にも翻訳書を数種刊行しており、自分自身の考え方と異なる出版物であっても積極的に出版している。新聞を編集する上では編集者との衝突も多く、伝右衛門と意見が合わず辭めていった編集長も多いと伝えられる

*7 「をとめ新聞」第 1 号、2 丁裏に、「女子師範学校新築竣功來る廿五日開校の典を挙らると聞き祝ひの意を左に」という新聞社員竹野素直の記事がある。そのなかで「本縣女子師範学校を開き良家処女達を集めて婦の道を教ふるの初日にて其の事業の美效はその処女等が人の妻となり人の母と為り其家の事業を助け保ちその子女を教へ育つるの日に至りて著らはれぬべし其効や即て幸福の菓を結ぶ」という女子教育觀が述べられている。

*8 「をとめ新聞」の他に、脚注*2 と同様の広告が『仙台新聞』(明治 10 年 8 月 5 日付)にもみえる。

なかで、出版物についてはその内容に寛容であったという印象が残る。この理由として考えられるのは、内藤伝右衛門が手がけた二つの事業、新聞事業と出版事業との関係である。新しい物好きで進取の気性に富む内藤伝右衛門は、地方の出版者としては最も早く高額な新聞印刷機械を導入した。しかし新聞の購読数が思うようにのびなかったため、資金繰りには苦労した。そこで、印刷機械の代金を支払うために、その活字を使って多くの出版物を印刷・販売し、次第に出版事業に力を入れるようになった。『家政要旨』にみられる印刷方法の変遷には、こうした伝右衛門の事情が反映されている。しかし伝右衛門の印刷事業は単なる営利本位のものではなかった。福沢諭吉の『学問のすすめ』などを、ほとんど販売せず各学校へどしどし寄付し、営利を省みなかったと伝えられる²⁰⁾。教科書出版・販売を通して、伝右衛門なりのやり方で、明治期における教育の発展のために積極的に尽力し貢献したとみることができる。『家政要旨』が出版され、全国の小学校や女学校などで使用された明治9~15年頃は、伝右衛門が最も華やかにその事業に打ち込んでいた時期であった。

さらに『家政要旨』の刊行経緯において重要な役割を果たしたのが永峯秀樹の長兄小野 泉である。小野泉は、内藤伝右衛門やその養母満寿と親交があった。甲州文庫には、内藤伝右衛門、満寿と小野 泉との間に取り交わされた手紙が多数保存されている。なかでも小野 泉校正、松平定能『甲斐国志』30巻、内藤伝右衛門、明治15~17(1882~1884)年の刊行をめぐっては、すでに東京で書店を営んでいた2代目伝右衛門と小野 泉との間に、頻繁に手紙が交わされている²¹⁾。この『甲斐国志』は、今日でも甲州の歴史を物語る際に、温故堂本として活用されている。この他にも、小野 泉の出版物の多くを内藤伝右衛門が出版している²²⁾。内藤伝右衛門が、東京築地の海軍兵学寮に勤務する永峯秀樹のもとに出版の依頼に訪れたのは、そうした長兄を仲立ちにしたものであったことは想像に難くない。『家政要旨 前編』小本には小野 泉による「序」が陰刻で印刷されている。幼少の秀樹に漢文の手書きをした長兄小野 泉は、『家政要旨』の普及を図るために、伝右衛門の依頼に応じる形で弟秀

*⁹ 甲州文庫には「内藤伝右衛門書簡」として小野 泉宛の書簡が17通残っている。

*¹⁰ 女子教育関連書に小野 泉校閲、貝原益軒著『女大学』内藤伝右衛門、明治11(1878)年刊がある。

樹の訳文に傍訳を施した。さらに、題字「玉匣金鑑」を書いた永峯の実父小野通仙・長兄泉ともに甲府においては医業を営む名士であり、両者の協力は、同書の普及に一役買っているとみることができる。

7. まとめ

明治初期の翻訳家政書の中で『家政要旨』の普及が高かったのは、その原書の内容、翻訳者永峯秀樹の訳文などと併せて、出版者内藤伝右衛門に与する部分が大きかったと考えられる。伝右衛門は、新聞事業の資金繰りのために出版事業に力を入れたわけであるが、教科書出版・販売を通して教育の普及に献身的に貢献した姿が伺われる。『家政要旨』の刊行についても、伝右衛門が積極的に普及を図るための工夫を行っている。本研究では、同書の刊行事情および同書の普及過程において、進取の気性に富む出版事業家内藤伝右衛門が大きく貢献していることを明らかにした。本稿でとりあげた内藤伝右衛門、さらに、翻訳を通してわが国の近代化に貢献した永峯秀樹、その長兄小野 泉のいすれにも共通することは、幕末から明治への転換期において、それぞれが家族や塾から受けた教育内容は異なるものの、教育を受ける機会には恵まれており、また新しい時代にふさわしいものを積極的に取り入れることで、地域・社会に貢献しようとする意欲と意気込みを持っていた点である。このような人材が欧米の文化・家政理念を受容する上で重要な役割を果たしたことが理解できる。

本研究を進めるにあたっては、石川松太郎氏、亀高京子氏、江原絢子氏より貴重なご助言をいただいた。また明野村教育委員会清水恭輔氏、佐野 隆氏、宮原みづ子氏、保坂八重氏には貴重な資料閲覧およびさまざまご助力を賜った。山梨県立図書館、東京家政学院大学附属図書館では、貴重な資料閲覧の便宜を図っていただいた。ここに記し深謝申し上げます。本研究の一部は、教育史学会第41回大会において発表した。

引用文献

- 1) 谷口彩子、亀高京子:『経済小学 家政要旨』とその原典との比較考察、家政誌、47, 289-302 (1996)
- 2) Taniguchi, A., and Kametaka, K.: Comparative Study of Mrs. E. F. Haskell's "The Housekeeper's Encyclopedia" and Beecher's Three Books on Domestic Economy, *Nihon Kasei Gakkaishi (J. Home Econ. Jpn.)*, 49, 223-234 (1998)

『経済小学 家政要旨』の刊行事情と内藤伝右衛門

- 3) 田中ちた子, 田中初夫 (編) :『家政学文献集成明治期Ⅱ』, 渡辺書店, 東京, 解説, 1-6 (1966)
- 4) 田中ちた子, 田中初夫 (編) :『家政学文献集成明治期Ⅲ』, 渡辺書店, 東京, 解説, 1-8 (1966)
- 5) 永峯秀樹 (纂訳) :『興産教授 農学初步』, 内藤伝右衛門, 甲府, 序2丁表 (1879)
- 6) 佐藤森三 :『甲州郷土と人』, 俊成出版社, 東京, 131-140 (1970)
- 7) 清雲俊元 :『内藤伝右衛門, 郷土史にかがやく人々 (集合編)』, 青少年のための山梨県民会議, 甲府, 227-243 (1974)
- 8) 山梨の印刷史編集委員会 (編) :『山梨の印刷史』, 山梨県印刷工業組合, 甲府, 46-59 (1977)
- 9) 山梨日日新聞社 :『山梨日日新聞社百年史』, 山梨日日新聞社, 甲府, 10-29 (1972)
- 10) 植松光宏 :『山梨の洋風建築』, 甲陽書房, 東京, 33-36, 195-197 (1977)
- 11) 佐藤森三 :『甲州郷土と人』, 俊成出版社, 東京, 134 (1970)
- 12) 佐藤森三 :『甲州郷土と人』, 俊成出版社, 東京, 138 (1970)
- 13) 清雲俊元 :『内藤伝右衛門, 郷土史にかがやく人々 (集合編)』, 青少年のための山梨県民会議, 甲府, 241 (1974)
- 14) 清雲俊元 :『内藤伝右衛門, 郷土史にかがやく人々 (集合編)』, 青少年のための山梨県民会議, 甲府, 229 (1974)
- 15) 高畠藍泉 (編) :『明治名婦百首』, 博文館, 東京, 42丁裏 (1903)
- 16) 清雲俊元 :『内藤伝右衛門, 郷土史にかがやく人々 (集合編)』, 青少年のための山梨県民会議, 甲府, 228-229 (1974)
- 17) 『甲府新聞』明治7年1月9日付, 同8年4月7日付, 同9年8月1日付
- 18) 山梨県立図書館 (編) :『山梨県史』, 山梨県立図書館, 甲府, 第7巻, 413-415 (1964)
- 19) 山梨県立図書館 (編) :『山梨県史』, 山梨県立図書館, 甲府, 第7巻, 407-408 (1964)
- 20) 清雲俊元 :『内藤伝右衛門, 郷土史にかがやく人々 (集合編)』, 青少年のための山梨県民会議, 甲府, 240 (1974)